

## 第61回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム1

東日本大震災で被災した岩手, 宮城, 福島の3県における小児保健・医療の現状と復興

## 震災・津波被害の小児のところに与えた影響

～岩手県でのこころのケアのとりくみを中心に～

八木 淳子 (岩手医科大学神経精神科学講座/いわてこどもケアセンター)

## I. はじめに

2011年3月11日の東日本大震災・大津波による岩手県の犠牲者数は5,000人を超え, 1,000人以上がいまだ行方不明のままである(2014年1月現在)。孤児(94人)・遺児(482人)を含む多くの子どもたちが, 恐怖と喪失, それに続く悲嘆を経験し, 3年という時を経た今でも, なお鮮やかになる記憶に苦悩する人々がいる。

岩手県は北海道に次ぐ広大な面積を持ち, 山岳地帯が隔てる内陸部と沿岸部とでは人口や社会資源の分布に大きな不均衡が生じている。沿岸地域の小児科医・精神科医数は, 震災以前から(現在も)全国平均を大きく下回っている。

## II. 岩手県における子どものこころのケア(医療的側面)

## &lt;3つの子どものこころのケアセンター&gt;

子どものこころのケアを進めるにあたり, 傷ついた子どもたちを支える周囲の大人もまた被災者であり, ケアを担う社会資源の不足, 岩手県の広域性, 外部からの支援を受け入れるための準備性(文化や風土を含む地域特性)などの課題が山積していた。被災地の現状とニーズに即した支援を展開し, 子どもの成長発達を長期的に見守るためには, 地域特性に配慮した顔の見える(face to face)支援が不可欠であり, 地域に根差した支援のための現地拠点を設置することが肝要と考えられた。

筆者らは, 岩手県の特性をさまざまな角度から考慮したうえで, 地域の社会的・人的資源を有効に活用す

るため, 既存の資源を活かしたケアシステムの試みとして, 宮古児童相談所(宮古市)の一室を拠点とした「宮古子どものこころのケアセンター」を, 県児童家庭課(現子育て支援課)とともに開設し(2011年6月), パイロット的に運営しながら, このシステムを7月には気仙(児童家庭センター大洋内), 8月には釜石(釜石保健所内)へと拡大していった。3つの子どものこころのケアセンターへの医師の派遣には, 法務省矯正局, 日本児童青年精神医学会, 東京都, 岩手県医療局などの関係各機関から協力が得られ, 開設から2013年4月までの22か月間に延べ700人を超える利用者があった。

## &lt;いわてこどもケアセンターの開設から1年&gt;

復興が遅々として進まない中で, 被災地の子どもたちはストレス状況下での日常生活を余儀なくされ, 長期的なこころのケアの継続の必要性が見込まれた。さらに, 内陸部に転居してきている子どもたちへの支援のニーズの高まりを受け, 沿岸の3つのセンターに加えて, 全県的・包括的なケアを担うハブ施設としての「中央センター」の設置が望まれるに至った。岩手県は2013年5月, 日本赤十字社の協力のもとクウェートから寄せられた義捐金によって, 「いわてこどもケアセンター」を開設し, 岩手医科大学に運営を委託した。「いわてこどもケアセンター」は, 中央センター(岩手医科大学矢巾キャンパス・災害時地域医療支援教育センター内)と, 前身の宮古・釜石・気仙子どものこころのケアセンターをランチとして持つ, 岩手県では初の児童精神科専門施設である。多職種スタッフ(児

童精神科医，看護師，精神保健福祉士，臨床心理士，作業療法士，保育士などが配置され，専門的な診療と包括的な支援を目指している。

中央センターに集約した予約管理システムにより，全県のニーズの動向を把握し，沿岸ブランチを地域の

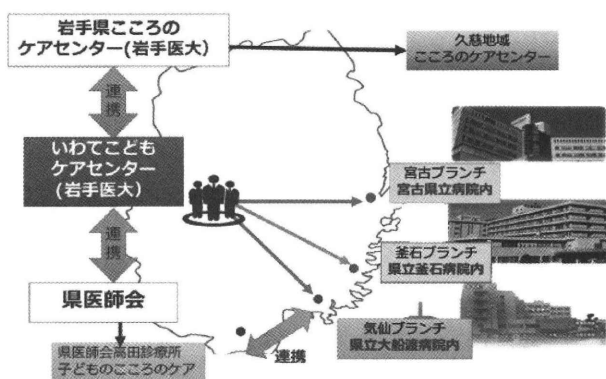


図1 いわてこどもケアセンター巡回診療システムとネットワーク

基幹総合病院内に移設して定期的な巡回診療を行うとともに（図1），中央センターでの外来診療やデイケア，コンサルテーションを実施している。医学教育機関としての側面では研修・研究，人材育成などの役割も担う。

震災から2年半が経過した現在，いわてこどもケアセンターを受診する子どもたちの訴えや症状はさまざまであり，個別性，背景の複雑化が進んでいる。診断としてはストレス関連障害と発達障害圏が多く，開設から半年間の受診件数は，前身の岩手県子どものこころのケアセンターでの過去2年間を大きく上回る（図2）。受診者年齢分布では，中学生・高校生など年齢が高い子どもたちの受診が増加しているのが特徴である。このことは，過去2年間において，低年齢の子どもたちの受診が大半を占めていたのとは対照的である（図3）。被災の影響を受けた子どもたちの年齢層が時を経た分だけ上方にスライドしたとの見方もできるが，比較的年長の子どもたちは，ストレスを抱え込みながらも過剰適応的に地域の復興を支えつつ生活してきた可能性があり，筆者の臨床的な実感としては，むしろ3年が経過した今になって，ようやく症状を出せるようになった年長の子どもたちが少なくない。

当センター初診時に保護者が記載する予診票に基づく子どもの震災体験は図4のようになっており，震災から3年目を迎えても，わが子が震災当日にどんな被災体験をしたのか，正確には把握できていない保護者が少なからずいることがわかる。「そっとしておいてあげた方がよいのかと思って」という親の側の気遣いとは裏腹に，「誰も当時のことを聞いてくれないから話せなかった」と語る子どももおり，震災が残した傷跡の大きさと個々人が受ける影響の複雑さ，対応の難しさを改めて思う。

<症例（プライバシー保護のため，一部改変あり）>

●津波にのまれた体験を誰にも話せなかったAちゃん  
7歳（震災当時保育園年中）

Aちゃんは小学2年生，勉強がよくできて，活発な性格であったが，震災から2年が経過したころから雨や雷の音を怖がるようになり，雨の日は登校できなくなってしまった。保育園で被災。延長保育で残っていた4人の子どものうちの1人。保育園は津波で全壊し，保育士1人が亡くなっている。

初診時（震災から2年4か月），当時のことを尋ねると，津波にのまれた体験を思いつめたように切々と

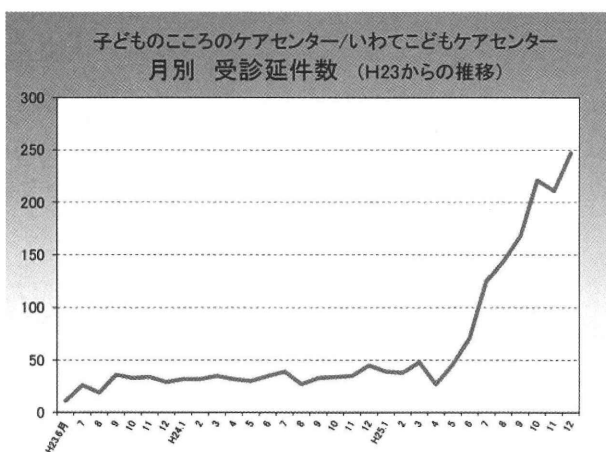


図2

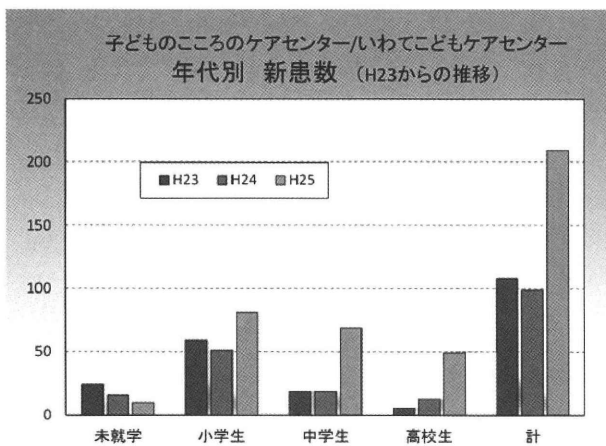


図3

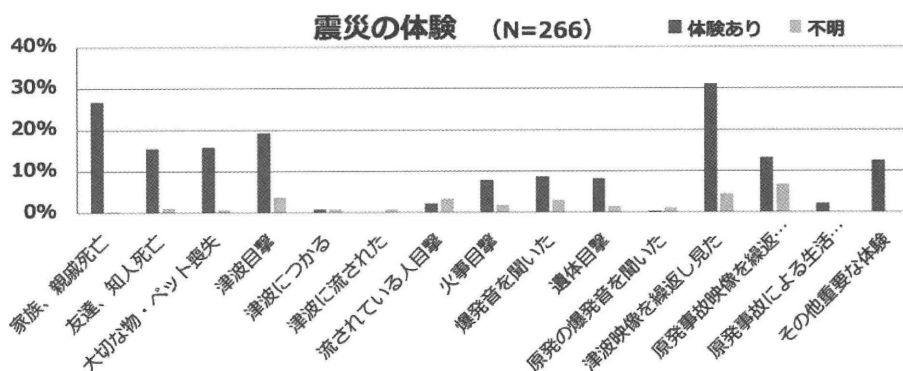


図4 いわてこどもケアセンター受診児の震災体験（保護者による予診票記録より）  
「不明」は保護者が「わからない」と答えたもの。

語り、「今まで誰にも話さなかった。聞かれないから、話しちゃいけないんだと思ってた。」と涙を流し、「すごく怖くて、苦しかった。」と泣きじゃくった。避難する際、保育士ともう一人の男の子と3人で津波に流され、波にのまれて握っていた保育士の手が離れてしまったという。「あのとき、わたしが手を放したから、〇〇先生が死んじゃった」という思いを、2年以上も抱えながら、誰にも話さずに過ごしてきた。両親が本児をいたわり、慈しみ見守ってきたのは言うまでもない。しかし、凄まじい体験をしたであろうわが子の当時の状況を「共有してよいのかどうか」すら判断できないほどに、親もまた傷つき、途方に暮れて過ごしていたのである。

その後、心理教育とトラウマ記憶の処理、認知の修正などの治療を受け、現在は元気に登校している。

### Ⅲ. 保育園コホートの結果から～被災体験と子どもの問題行動について～

厚生労働省指定研究（平成24～26年度）「東日本大震災が子どものメンタルヘルスに与える長期的影響に関する研究」は、被災3県の178名の子ども（被災当時保育園に在籍）とその保護者に対する、質問紙と生体試料、面接による前向きコホート調査である。筆者も分担研究者として岩手県を担当しているが、この調査面接の場が子どもと保護者のストレス関連症状やその回復過程を把握し、ケアを展開するうえで貴重な機会となっている。

震災から1年余りのベースライン調査の結果からは、90%を超える子どもたちが、震災に関連する何らかのトラウマ体験をしており、子どもの問題行動チェックリスト（CBCL）で臨床域に該当する子ども

もたちが、内向的問題行動27.7%、外向的問題行動21.2%、総合で25.9%に上ることがわかった。また、震災以前のトラウマ体験の有無が、これらの結果と有意に関連することが明らかとなった<sup>1)</sup>。

<症例（プライバシー保護のため、一部改変あり）>

#### ●父親の帰宅時刻を確認し続けるBくん 8歳（震災当時5歳）

2歳の弟とともに、保育園で被災。園舎間際まで津波が到達、高台に避難した。仕事に出ていた両親とは連絡が取れず、いつも送迎役の母方祖母も被災し、主要道路が分断され、迎えに来られなかった。父方祖母宅に身を寄せ、母親の安否がわからないまま2か月以上が経過。震災前まで母方祖母と生活をともにしていたBくんは、父方祖父母になじめず、母親のことを口にするこも、泣くことも一切なく、弟を守るように気丈に振る舞っていた。母親の遺体は、3か月が過ぎた頃、Bくんが予想した通りの場所で見つかった。

震災から2年が経過した、2回目のコホート調査の場で「お父さんが帰ってこなくなるかもしれないから心配。」と話したため、父親、祖母から詳細を伺うと、父親が職場を出る17時前から帰宅する19時まで、数十回にわたり父親の携帯に電話し、「無事かどうか」、「必ず帰ってくるか」を繰り返し尋ねることが、2か月以上続いていることがわかった。

Bくんは当センターを受診し、数回のカウンセリングを経て不安症状は消失し、元気に登校している。

### Ⅳ. 終わりに

甚大な被害をもたらした東日本大震災が、被災県に与えたダメージは計り知れない。その一方で、岩手県

の限りある資源を有効に活用すべく、さまざまな職種の力を結集し、専門領域の垣根を越えて「子どものこころのケア」の推進にとりくんだ足跡は、新たなネットワーク構築のきっかけとなった側面を映し出している。いまだ癒えることのない傷を抱えた人々、子どもたちへの支援・見守りは長期的スパンが必要であるが、大震災というピンチを再生と発展のチャンスととらえ、岩手県における子どものこころの診療・支援ネットワークの構築・拡充に全县をあげてとりくみ続けることが肝要である。

## 文 献

- 1) Fujiwara T, Yagi J, Homma H, Mashiko H, Nagao K, Okuyama M, GEJE-FC study team. Clinically significant behavior problems among young children 2 years after the Great East Japan Earthquake. PLoS One 2014 ; 9 (10) : e109342.
- 2) 八木淳子. 専門職の少ない地域での子どものこころのケア—宮古子どものこころのケアセンターのとりくみ—. 児童青年精神医学とその近接領域 2013 ; 54 (4) : 356-363.
- 3) 八木淳子. 地域に根差したこころのケア～宮古子どものこころのケアセンターのとりくみから～. LD 研究 2013 ; 22 (1) : 22-27.